

小浜正子・板橋暁子編（京都大学学術出版会 2022）  
『東アジアの家族とセクシュアリティ 規範と逸脱』

熱田敬子\*

本書は、①東アジアで「伝統」とされてきた儒教文化の歴史の変遷、②近代国家形成期における多様な状況—帝国主義国となった日本、植民地となった朝鮮・台湾、不平等条約の下に置かれた中国など、③冷戦期および現在の米中対立のなかでの国際秩序が及ぼす影響、から東アジアのジェンダー比較史を試みたものである。

日本のジェンダー構造は植民地支配と侵略によって朝鮮半島・台湾、中国にも影響を及ぼした。後発の帝国主義国としての成り立ちを支えたジェンダー秩序は現在の社会にも引き継がれており、東アジアの周辺国・地域との比較、越境研究は極めて重要である。

女性史、ジェンダー史の研究は第二波フェミニズムの影響を受けた研究者や在野の人々が取り組んできたが、中国については日本でもかなり蓄積がなされてきた。本書は、中国ジェンダー史を中心として、さらなる展開を目指す。それぞれの論者が扱う対象や方法論は、多岐にわたり、現在進行形の社会事象から古代までを網羅した研究論集となっている。

全体の構成は第Ⅰ部・現代の東アジアのセクシュアリティ、間に生殖（リプロダクション）の論考を配して、第Ⅱ部・東アジアの家族観に大きな影響を与えてきた古代以来の中国の家族規範と実態（3頁）が続く。

第Ⅰ部は、生殖再生産に貢献できない男性身体を逸脱とする、台湾と韓国の徴兵検査を分析した福永玄弥「冷戦体制と軍事化されたマスキュリティ」で始まる。徴兵制は社会において覇権的なマスキュリティを形作り、正当化する。同時に、徴兵制そのものが国際的緊張関係や人権価値の高まりの中で変容し、社会の変化もマスキュリティの形態に影響

を与える。

次に、「中国における包括的性教育の推進と反動」を、「先進的」な性教育教科書をめぐる論争とその影響から考察する郭立夫論文が続く。日本においては、中国では政府の監視・弾圧により市民社会が機能していないかのようなイメージが流布されているが、実際は政府が重要と位置付けていない性教育についても多様な現場の実践がある。性的マイノリティや農民工の子どもたちと連帯して進められてきた性教育実践が問題にされた事例を通じ、厳格なシステムと想定されがちな中国政府の検閲が、現実には国際的価値と保守的な社会意識がせめぎあう中での、対処療法的な統制になっていることを指摘する。

遠山日出也は、「中国のフェミニズムとセックスワーカー運動」が、セックスワーク非犯罪化をめぐる、対立や相互の批判を含みつつ、一致点を見出す過程を示している。日本でも長年、セックスワークと買春処罰のあいだで鋭いフェミニズムの対立が続いている。残された課題を含め、学ぶことの多い論文である。白水紀子の「台湾 LGBT 文学の現在」では、「新しいホモノーマティビティ」という視点で、LGBT運動が主流化する中で同時に、脱政治化されていく過程を批判する。

現在進行形の諸課題を通じてジェンダーとセクシュアリティをめぐる葛藤を明らかにする第Ⅰ部と、歴史的な深層に迫る第Ⅱ部の間をつなぐために置かれた Connecting Section は、生殖を扱うパートである。リプロダクションの近代化過程は、国家の政策と個人の権利がせめぎあうプロセスを映し出す。姚毅は「中国における生殖補助医療規制に見る排除と包摂」で、中国における代理出産の

\*早稲田大学 総合人文科学研究センター、ふえみ・ゼミ&カフェ

事例と議論をめぐって、包摂と排除の論理に迫っている。日比野由利は「アジアにおける代理出産ツーリズム」で、グローバル化された商業市場でプロダクションをめぐる欲望が、国境の枠を超えて追求されていることを明らかにする。各国の法制度や医療システムの変化は、国内にとどまらず、相互に影響を与え合っているのだ。

第二部では東アジアの前近代における「儒教的」文化の中で、中国の家族をめぐる規範と変容を描いている。第一部で見たような東アジアにおけるジェンダーやセクシュアリティの抑圧について、しばしばマジックワードのように安易に持ち出されるのが「儒教」である。しかし、中国の前近代だけを見ても、「儒教的」規範は多様なあらわれ方をし、変化している。下倉渉は「敦煌書儀はかく語る」で、敦煌書儀という婚姻儀礼のマニュアルから、唐代の婚姻儀礼において、父系制優先の原理とは整合しない妻側の家の強さが存在していた可能性を論証している。

佐々木愛は「近世中国における生命発生論」で、儒教・道教・及び中国医学の気の思想において、「生命というものは父母の気の交感によって生まれる」(288頁)ものであるという基本原則が維持されてきたことを指摘する。女性排他的な父系制生成論は明代末期以降、上からの教化というより、民衆・一般社会の要請によって起きてきたものであり、思想的源流に原因を求めただけではなく、社会的要因を明らかにしなければならないという。

板橋暁子は「魏晋南北朝時代の「以妾爲妻」「以妻爲妾」について」で、妻と妾の間の地位の移動実態が、時代や地域によって異なることを指摘する。魏晋南北朝時代を通して比較すると、妻妾間の身分移動が比較的容易だった時代と、厳格に罰される時代がある。また、妾や妾の子が受ける制約や賤視にも時代によって差が

あった。

五味知子は「清代の地方志における同姓通婚と同姓不婚」で、前近代中国で大原則とされていた「同姓不婚」について、礼法の上では重視されているにもかかわらず、実際には必ずしも守られていなかったと示している。

これら第二部を通じてわかるのは、画一的に見られがちな中国前近代の家族をめぐる規範も、社会的な実態を丁寧に見れば様々なバリエーションがあるということだ。末尾、泉谷陽子「人民共和国建国初期の大衆運動と主婦」は、主婦たちが社会主義体制に新たな「良妻賢母」として動員され、前近代からの規範が大きく変化する過程が分かる。上海は計画生育が最も素早く浸透した地域の一つとされるが(小浜 2020)、こうした主婦の組織化の下地と無縁ではないかもしれない。

以上、通読すると、当初野心的な試みと見えるかもしれない、東アジアのジェンダー比較史が中国史を中心として確かに浮かびあがってくる。挿入されているコラムも韓国の女性映像作家と運動について扱った油谷佳歩、小川快之の書く清代の宮廷歳時とジェンダー、東北地方の都市・奉天におけるモダンガールについて扱った上田貴子と、現代、前近代、近代のイメージを膨らませる助けとなっている。

本書は、通史的に比較を行った大変重要な試みである。一つだけ残念なのは、この本が日本で出版されたことを考えれば特に、東アジアの現代のジェンダーとセクシュアリティの構造に大きな影響を与えた日本の近代化と、帝国主義、植民地支配、侵略戦争についての論考が今回は収録されていないことだ。ただ、著者たちの研究グループでは本書が最初の比較史的成果ということである。今後、その視点が入った研究成果がでることを期待したい。

## 参考文献

小浜正子, 2020, 『一人っ子政策と中国社会』京都大学学術出版会